
ユメノナルキ

磯崎愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユメノナルキ

【Nコード】

N4191P

【作者名】

磯崎愛

【あらすじ】

「かつて、バクはユメノナルキの下でくらしていたそうだ」……
そこは「視界」と呼ばれる夢秤王の支配する処。幻想小説。

自サイト「唐草銀河」からの作者による転載です。

かつて、バクはユメノナルキの下でくらししていたそうだ。

あの日、わたしはつれあいのバクを探して外に出た。

いつも一緒に寝ていたのに、目がさめると姿がない。パイプベッドのよれたシートの上にバクの温もりはわずかに残されていて、じきに戻るかと二度寝を決めこむつもりが、奇妙に心臓が高鳴った。

とるものとりあえず探しに出てから、一年が経つ。

バクは真正銘の猫で、夢使いのわたしのつれあいだ。

夢は東の果てからやってきて、その類い稀な香音でひとびとの心をかきならす。わたしは客の夢を聞き、その夢を客の望む香音になるよう爪弾いて返し、代価をもらう。そうして変奏された悪夢はバクの糧となった。

ものごころつく前は、バクがわたしの面倒をみてくれたらしい。わたしたちは長らく、うまくやっていたはずだった。

バクの居場所はかいても見当つかなかった。

毎夜うなされて壁をける左隣の高利貸しはもちろん、バクと住むことをしぶしぶ許した大家、彼氏とうまくいかない時だけやってくる女学生まで、バクの姿を見なかったと口をそろえて言ったものだ。歩きつかれて茜色に染まる西の彼方に目をむけたとき、ずっと昔、バクがどこからきたか語ったことを思い出したのだ。

指笛をふくと、紺青の翼を羽ばたかせて鳥船がおりてきた。

はじめ、鳥船はわたしを乗せることを楽しんだけれど、しまいは西の果てにいきたいと言いだした。

わたしは自慢の髪をほどいて一筋とり、爪を切つて、それを鳥船の尾に結んでやった。わたしの爪は鳥船が風を切るたびにえもいわれぬ好い音を奏で、わたしの髪は夢が落ちてくるたびにそれを震わせて響しい匂いをふりまいた。

気をよくした鳥船は東の果ての高みをめざし、ひゅういひゅうい

と昇っていった。昇れば昇るほど、飛べば飛ぶほどに夢はかくわしく光りあふれ、音鳴らし、眩しさのなかを無数の泡のようにおりてきた。

とうとうわたしはユメノナルキの下にたつことができた。

それは視界をおおう大樹で、色鮮やかな夢を枝にたわわに鳴らしていた。夢は香音にこたえるようにして枝を離れて視界へとおりていく。

ふと、不安になる。

見わたしても、ここには悪い夢はひとつもない。

悪夢のないところで、わたしのバクは生きていられるのだろうか。爪先立って、夢のひとつに手をのばしてたしかめようとしたところ。

「夢使い、それは汝が夢の在処だ」

突然の声に飛びあがり、あわてて手をひっこめて振り返る。

夢秤王だ。

王はまたの名を視界王といって、その名にふさわしい黄金の冠をかぶり、手には古めかしい夢秤をもっていた。

視界の始まりのときから東の果ての高みにおわすその方は、眩しいくらい光り満ちあふれるこの場で、すべての闇を集めたような漆黒をまとっていた。

夢使いは、王が夢秤で定めた香音を少しだけ狂わせるのが仕事だ。夢に託された音色を聞いて、よって分けたり捨てたり合わせたりする。

言うなれば、王の仕事をちょっとだけ盗むようなものだ。わたしはほんのすこしだけ萎縮した。

王の瞳は噂どおりひとつしかなかった。その暗い、光を反射しない闇の深淵のような隻眼が、こちらをじっと見つめている。

「バクを探しにきたのではないのか」

王の問いかけにびっくりして息をとめた。
なぜ、知っているのだろうか。

身動きもできないわたしに、王はしずかに言って聞かせた。

「バクはかつてヨの妃だった。今は夢食王として誓におる。夢のみが、落ちていきつくところだ。光のおりていきつくことのできぬ誓に、妃は堕ちていつてしまったのだ」

では、ここにはわたしのバクはいないのだ。

どうしようもない切なさがおそってきてうなだれる。

王はかまわずに言葉をついだ。

「妃は禁断の実を食み、悪時機となつてしまった。悪い夢はそれを食べずには生きていられない妃を思い、ヨが視界に落としていたのだが、それももうお終いだ」

おしまい、とくりかえしたわたしに王が近づいてきた。

恐ろしいことがおきるような気がして一歩しりぞいたとたん、ひとときわ高く香音が弾け、わたしはみるみるその音に吸い込まれてしまった。

王は夢秤にわたしを乗せて満足そうに微笑んだ。

そして、口笛で呼び寄せた鳥船の背に傾いだ秤ごとくりつける。
王は鳥船の青い羽を労わるように撫でた。

「西の果ての誓にお行き。我が子がやってきた祝いの言葉を告げるのだ。ヨは約束の地に行くことがかなわぬが、妃の食べた《夢の成る気》はこうしてみごとに育ち、光とどかぬ誓に美しい音をはるこ
とだろっ」

視界王はそう言って、秤のもう片方に失われた真白き瞳をのせてくれた。

秤は見えるものと見えないもの、見るものと見ないもので平衡をたもち、鳥船に運ばれて西の果てに辿りつくことだろう。

そこで、わたしは夢にも知らない母と会う

終

(後書き)

この「視界」がお気に召しましたら『夢のように、降りてくるもの』
(BL)もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4191p/>

ユメノナルキ

2011年10月8日05時00分発行